

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	農学部
-----	------------	----------	-----

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 I 教育の実施体制

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

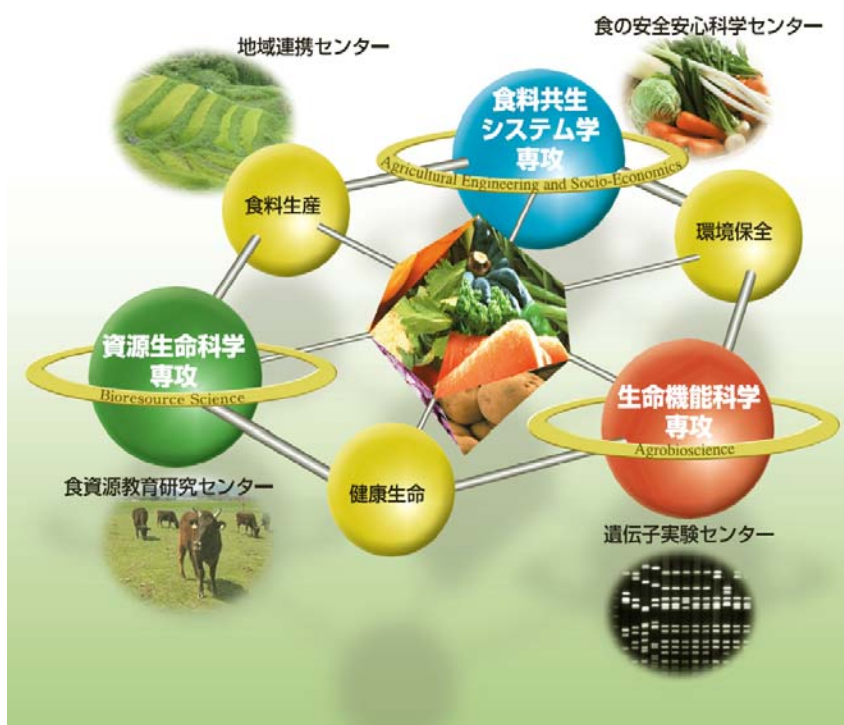
○顕著な変化のあった観点名： 基本的組織の編成

中央教育審議会答申で強調された「学士力」及び「教育の実質化」を実現し、社会動向や学問の発展に対応するためには、時代に適応した教育実施体制の見直しが必要である。神戸大学農学部では、食料の安定供給、環境の保全、新規バイオ産業の創成及び食の安全安心に向けた科学技術の開発が、世界レベルの重要な国家戦略項目であると考え、『農場から食卓まで (From farm To Table) の食料・環境・健康生命』をモットーとする農学教育理念の下、平成 20 年 4 月に 5 学科体制から 3 学科 6 コース体制に改組した。これは、平成 19 年 4 月に改組した農学研究科の 3 専攻 6 講座と同じ BMD 一貫体制であり、学生や両親・就職先企業等にわかりやすい教育体制である。

下図に示すとおり、生産環境工学と食料環境経済学で構成される「食料共生システム学専攻(学科)」は「環境保全」と「食料生産」、応用動物学と応用植物学で構成される「資源生命科学専攻(学科)」は「食料生産」と「健康生命」、応用生命化学と農環境生物学で構成される「生命機能科学専攻(学科)」は「健康生命」と「環境保全」を、それぞれ教育研究する組織体制であり、食資源教育研究センターが「農場」サイドを、食の安全・安心科学センターが「食卓」サイドを、地域連携センターと遺伝子実験センターがこれらを補完連携する組織体制を整えている。

用語の補足説明

BMD 一貫体制： 学部 (Bachelor)、博士課程前期課程 (Master)、博士課程後期課程 (Doctor) での一貫した基本組織体制をいう



現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	農学部
-----	------------	----------	-----

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅲ 教育方法

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名: 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

本学部では、『農場から食卓まで (From farm To Table) の食料・環境・健康生命』をモットーとする教育を実践するため、①高い志をもつ(動機付け)、②地域社会を支える仕組みを理解する、③コミュニケーション能力を高める、④実体験に基づく実践的な問題解決能力を身に付ける、を学習目標に設定して、高い専門性をもつ体系的カリキュラム設計を行っている。具体的には、1年次の導入教育科目(必修科目)「食の倫理(前期)」と「緑の保全(後期)」、2年次の専門基礎科目と、3年次の専門科目、4年次のゼミと卒業研究に加えて、実験・実習・演習を重視した実体験による効果的な知識獲得の工夫がなされている。これらの工夫には、以下のようなものがあげられる。①農場実習・牧場実習: 附属食資源教育研究センターを利用してこれまで継続実施している、②熱帯農学海外演習・アジア農業環境海外演習: ベトナムやフィリピンの学術協定校を訪問・連携して海外で平成17年から実施している、③農業農村フィールド演習: 篠山市農家を訪問・連携して平成19年から実施している。

さらに、平成20年度の文科省教育GPプログラムに採択された『食農コープ教育による実践型人材の育成』では、以下のような新たな授業形態の組合せと学習指導法の工夫を行った。①キャリアデザイン論(1年次): 農業者・農協職員・企業人などの多彩なキャリアをもつ食や農の実務者・実践者による講義により、学生の志を高める動機付けを行う、②兵庫県農林水産行政論(2年次): 兵庫県農林水産部職員がオムニバス講義を実施し、ワークショップ方式による施策提案を考え、地域社会を支える仕組みを理解する、③政策立案演習(3年次): 約10人単位でグループワークを行い、テーマ設定、調査分析、政策立案・事業計画の策定を行い、政策・事業の管理(PDCAサイクル等)や評価手法を学ぶことにより、コミュニケーション能力を高め、実体験に基づく実践的な問題解決能力を身に付ける。こうした国内外の実体験を重視した多彩な授業形態の組合せと学習指導法の工夫が実践されている。

○顕著な変化のあった観点名: 主体的な学習を促す取組

学生の主体的な学習を促すためには、『高い志をもつ(動機付け)』と『目的をもった学習』が必要である。1年次の導入教育科目(必修科目)「食の倫理(前期)」と「緑の保全(後期)」や、「キャリアデザイン論」は学生の動機付けを効果的に高めている。また、農業生産技術を実践的に学ぶ「農場実習」や「牧場実習」、地域社会を支える仕組みを理解するための「兵庫県農林水産行政論」や「政策立案演習」、実体験に基づく実践的な問題解決能力を身に付けるための「農業農村フィールド演習」や「熱帯農学海外演習」、「アジア農業環境海外演習」は『目的をもった学習』へ学生を効果的に導いている。後者は日本語と英語のコミュニケーション能力の自主的向上にも効果を発揮している。これらの取組には、通常の講義にはない担当教員の努力と工夫がなされている。平成20年度に実施された「アジア農業環境海外演習(フィリピンUPLB&IRRI)」を例にとり、具体例を説明する。①事前学習: 『高い志をもつ(動機付け)』と『目的をもった学習』を促す目的で、出発前に2回の事前学習会を行い、各自の学習テーマ及びフィリピンの歴史やIRRIなどについて事前学習を行った。②事後学習: 帰国後に参加学生全員が参加して、プレゼンテーションによる報告会を実施し、英語と日本語による報告書を作成した。英語の報告書は海外演習先のUPLBとIRRIにも送付した。報告書には、海外演習プログラムに対して、「安易な先入観からは想像し得なかったフィリピンの側面が見られ、貴重でとても刺激的な経験となった。」等、学生からの高い評価を得ている。